九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ベルナノスのふたりの聖人　ドニサン神父とアンブリクールの司祭

野村，知佐子

https://doi.org/10.15017/9993

出版情報：Stella. 17, pp.179-190, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

ベルナノスのふたりの聖人

——ドニサン神父とアンブリクールの司祭——

野　村　知佐子

ベルナノスの作品の多くには，子供あるいは子供の心をもつ人物の死が描かれる。子供の死を転回点として物語は新たな様相を呈するのである。その属性が無垢であることから彼らの死がキリストの死とかさなり合うことはいうまでもない。キリストの死後，神と人間との関係性が一変するように，彼の描く作品世界においても子供の死は物語の流れに一石を投ずる機能を担っている。物語が子供の蘇生への試みを中心に展開しているとすれば，その成否は当然その後の物語の流れを決定するといえよう。本稿では『悪魔の陽の下に』(1926)と『田舎司祭の日記』(1936)をとりあげる[1]。子供を蘇らせるという試みを両方の物語の中心としたとき，その前後に登場する人物の属性と機能にいかなる変化が生じるかを検討したい。ベルナノスの作品世界において，出会いを体験し目と目を見かわすことがまさしく自らの分身を見いだす行為であるなら[2]，『田舎司祭の日記』の後半部と『悪魔の陽の下に』の第2部「ランブルの聖者」は，ほとんどシンメトリックともいえる登場人物の配置によって，2人の聖人の差異をたがいに照射するものと思われる。

*

『田舎司祭の日記』の主人公であるアンブリクールの司祭は，医師から胃癌の宣告をあたえられたとき，「ひょっとしたらあなたもあの有名な皇帝と同じように立ったままかあるいはそれに近い形で死ぬかもしれません」[J.1240]といわれる。「立ったまま死ぬ」という表現は『悪魔の陽の下に』のドニサン神父を思わせずにはおかないが，最初に指摘したいのは彼らがいずれも死んだ子供と母親の登場する場面に介入することによって試練の場に立たされるとい

うことである。ドニサン神父はある母親の願いを受け，脳膜炎で死んだ子供を蘇らせるべく，その死体の横たえられた部屋で死者と向かいあうが子供は蘇らない。一方アンブリクールの司祭は，死んだ息子への思いのなかで長年絶望のうちに生きてきた伯爵夫人と対決し，死んだ息子の象徴ともいうべき望徳を彼女の内に蘇らせることに成功する。こののち前者は「おまえは私の平安をほしがっていたな，さあそれを取りに来い」[S.308] ということばを残し告解室のなかで無残な死を遂げ，後者は胃癌に冒されながらも「すべては恩寵だ」[J.1259] ということばを残して平安のうちに息を引きとったことを考えるとき，彼らの明暗を分かつものは死んだ子どもを蘇らせようとする試みの成否であると思われる。

では試練の前後に彼らとかかわる登場人物はいかなる属性と機能をもつのだろうか。まずは2人の聖人の試練の前に登場する人物としてムヌゥ＝スグレ神父とトルシーの司祭，ムーシェットとシャンタルらの属性と機能についてそれぞれ検討したい。

ムヌゥ＝スグレ神父とトルシーの司祭

ムヌゥ＝スグレ神父とトルシーの司祭は有能で慧眼な上司であり，主人公の司祭の唯一の理解者である。しかし理解者であるにもかかわらず，彼らは主人公と霊的冒険をともにすることができない。ピエール・ヴェルディエルは，『悪魔の陽の下に』においてドニサン神父が神とかかわりをもつ空間は「敷居 seuil」によって外部世界から隔てられていることを指摘し，ムヌゥ＝スグレ神父はその真の慧眼さとドニサンへの理解にもかかわらず，敷居の外部にとどまっているという[3]。じじつ，友人であるドマンジュ神父にドニサンのことを話した直後，ムヌゥ＝スグレは自身の死の近いことを予感する。もはや彼には若い偉大な神父が聖人として完成を助けるのに十分な時間が残されていないことを痛感するのである。唯一の理解者を失ったドニサン神父は，孤独のうちに聖性への道を歩まなくてはならない。老司祭は，ドニサン神父に神の名が記されていることを示すという機能を果たすにすぎない。一方アンブリクールの司祭は自ら苦悩のなかで孤独を選びとろうとする——

もし私が自分の陥っている苦悩について，誰にたいしてであれ打ち明けたいという欲

> 望に屈したとしたら，神と私の最後の関係は断たれ，私は永遠の沈黙のなかに入っていくような気がする。[J.1130]

この沈黙への意志は，伯爵夫人の死の顛末についてトルシーの司祭からたずねられたとき確固たるものとなる。彼は故人の秘密を厳守するため，敬愛するトルシーの司祭にすら沈黙を守る。このときアンブリクールの司祭はオリヴィエの園のキリストの孤独を思うのである――

> じつはもうずっと前から私はオリヴィエの園に自身を見いだしていたのだ。そしてあの瞬間，そう，奇妙なことだが，主がペテロの肩に手をかけ，たずねるのも無駄でほとんど無邪気な，しかしいかにも親しげで優しげな「汝，眠れるか」という問をかけたもうたまさしくあの瞬間に身をおいていた。[J.1187]

キリストがオリヴィエの園で死の不安に苦しめられるとき，弟子たちはすべて眠りこんでおり，誰ひとり彼と苦しみをともにするものはいなかった。ミシェル・エステーヴは，「イエスは死の苦しみにはいるとき，その弟子たちから引き離された。イエスに倣うためには最も近しい者，最も親密な者から引き離されなければならない」というパスカルのことばを援用し，沈黙を選んだ司祭の姿はイエスの姿の倣びにほかならないと述べている[4]。キリストが最も親しい者である弟子たちから引き離されたのなら，アンブリクールの司祭もまた彼の最も敬愛するトルシーの司祭から引き離されなければならない。彼がトルシーの司祭を拒むことは必然であり，その意味においてこの老司祭はムヌゥ＝スグレ神父と同様，若い司祭に聖寵が宿っていることを示しはするが，その霊的冒険の外部にとどまることを余儀なくされているのである。

ムーシェットとシャンタル

2人の老司祭が若い司祭に聖寵への道を指し示す機能を担っているとすれば，指し示された方向に彼らが進むとき，いわば導き手として登場するのがムーシェットとシャンタルという2人の少女である。「若い雌の獣」[S.75]，「天使の堕落以前の，おそらくは罪以前の古代の世界の」[J.1133] という表現に表されているように，彼女たちの姿はかぎりなく始原に近い女性，最初の人間であるアダムを罪へと誘ったイブの姿を連想させるが，両者はいずれも父親

にたいする憎悪と反抗心を抱いている。ムーシェットは灰色の家庭に絶望し，凡庸な父親にたいする抑えがたい嫌悪の念から解放を求めてカディニャン侯爵の愛人となる。他方シャンタルは父親である伯爵を敬愛して生きてきたが，彼が自分の家庭教師と関係を結んだことを知って，はじめてその凡庸さに気づき絶望にとらえられる。激しい反抗心をかかえてシャンタルは司祭に叫ぶ——

> もしも人生が私を失望させたとしてもかまうもんですか。私は復讐してやります。悪にたいして悪で報いてやります。[J.1226]

これにたいして司祭は，彼女が「悪にたいして悪で報いる」ときこそ彼女は神を見いだすであろうと答える。レオン・セリエによれば，『悪魔の陽の下に』のなかにしばしば見られる「父性 paternel」ということばには非常に軽蔑的な意味が込められている。父親としての権威を発揮するのではなく，おのれの無力さを隠匿するために家族の者にたいして専制的になっているにすぎない父親を疎んで，ムーシェットは「父性の地獄 la géhenne paternel」から逃走するのだが，彼女が探しているのは真の父に他ならない[5]。つまり父親への反抗からはじまった2人の少女の反抗は，やがては真の父である神への探求に移行していく可能性を内包しているのである。

彼女たちを媒介としてはじめて罪に触れた司祭は，罪に肉迫することによって聖人としての試練へ導かれていくのである。ドニサンとの邂逅で真の父を見いだすもののムーシェットは自殺を企て，聖堂のなかで死ぬことを切望する。一方，母親である伯爵夫人とアンブリクールの司祭の会話の内容をすべて知りつつ，シャンタルは司祭へ反抗心を抱くあまりあえてその内容を偽証する。あるいはスキャンダラスな死によって，あるいは偽証によって，2人の少女はいずれもが司祭たちを世間の誤解のなかに投げこむ。これによって司祭たちは一層沈黙を強いられることになるが，沈黙が聖人を成熟させる絶対条件であるとするならば，少女たちは逆説的に司祭の聖化に手を貸しているといえよう。

以上のように，前半部に登場するムヌゥ＝スグレとトルシーの司祭，ムーシェットとシャンタルは物語の展開において同様の属性と機能を有している。つまり老司祭は主人公の司祭を使命に目覚めさせるべく機能しており，2人の少女は司祭たちを罪にかかわらせることによって，彼らの聖人としての完成を

助長しているのである。このように司祭たちの試練は死んだ子供を蘇生させる試みにおいてその頂点にたっするのだが，明暗を分けたそれぞれの試練の後，彼らをとりまく人々の属性と機能にはいかなる変化が見られるのだろう。以下，サン・マランとオリヴィエ，ガンビエ医師とラヴィーユ医師，リュザルヌの司祭とデュフレティについてそれぞれ考察しよう。

アントワーヌ・サン・マランとオリヴィエ

アカデミー・フランセーズの会員であるサン・マランは富と名声を手にした享楽的な老作家である。この作家と比較対照してみたいのは，伯爵夫人の甥であり外人部隊に所属するオリヴィエである。前半の2組のばあいとは異なり，ここでは2人の属性の違いが目につく。まず年齢差そのものがあげられるが，ベルナノスが若者あるいは若者の心をもつ者を神と対峙する可能性をもつ存在として描き，老人を自らの閉塞状態のなかで汲々とする不安に満ちた存在として描いていることを考えれば，その違いはますますきわだってこよう。だがそればかりではない——

> 神の面前で麦畑に倒れ伏したペギーを見て，大戦で10分の1を殺された青年たちは，絶妙な批判精神がその爪を研いでいる長椅子からうんざりと遠ざかった。[S.297]

> かつてもてはやされたディレッタントという言葉ほど今日不評を招いているものがあろうか。新しい世代は明らかに別のしるしを帯びていた。それが何なのかは後になってわかった。それは自己犠牲というしるし，軍人たちの羨望する名誉ある運命だった。[S.302]

サン・マランを「長椅子」に腰かけ，その批判精神を磨いているディレッタントとすれば，「自己犠牲」とは自分たち兵士を国家に売りわたし，良心を捨てさせたキリスト教教会に激しい憤りを覚えるオリヴィエにこそ似つかわしい。懐疑主義を標榜する作家と，外人部隊で死と隣りあわせの毎日を送る兵士という属性にベルナノスの価値観が導入されることによって，それらは対極に位置するものとなるのである。だがこの違いにもかかわらず，彼らのあいだには共通点も見いだすことができる。老作家はこの世の栄華を堪能してきた人物である。他方，司祭とともにオートバイの遠乗りをする外人部隊の青年は青春その

ものの具現化である。一方は富や名誉を，もう一方は青春そのものを体現しているとすれば，彼らはいずれもこの世の歓びを携えて司祭のもとを訪れたといえまいか。

ランブルの聖者との邂逅を切望するも，サン・マランが好奇の思いで開いた告解室のなかで，聖人は立ったまま息絶えていた。ヴェルディエルは，「敷居」の上で立ち塞がるようにして死んでいたランブルの聖者の姿があたかも内部の聖なる空間にサン・マランが侵入することを拒むかのようだと指摘している[6]。老作家への拒否とは彼が備えている価値への拒否につながる。サン・マランの携えてきた富と名声をランブルの聖者は拒絶したといえるだろう。さらにはランブルの聖者はその死によって自分の似姿をこの老作家のなかに見ることを拒みさえするのである。これにたいしてオリヴィエはアンブリクールの司祭のなかに自分の属する連隊の兵士たちと同じ顔を見いだす。オリヴィエに誘われてオートバイに乗せてもらうとき，この世の歓びに背を向けて生きてきた司祭は生まれてはじめて青春を謳歌する――

> 私にはわかった，青春が祝福されたものであることが――青春は冒険である――そして私は説明のつかぬ予感から，その冒険のいくらかを――ときがいたれば私の犠牲がまったきものになるのに必要なだけ――経験することもなく私が死ぬことを神はのぞまれぬのだということを理解し，私は知った。ほんのわずかのこの栄光の一瞬を私は経験したのだ。[J.1211-1212]

青春の歓びを味わいながら彼は，神にたいする自身の犠牲は青春の歓びを知ってこそ完璧になることを直感するのである。

このようにサン・マランとオリヴィエはその属性においてさまざまな対照性をなしながらも，この世の歓びを2人の司祭にもたらすという点において共通している。しかるに彼らのさし出す贈物を一方は拒絶し，もう一方は受けとる。とすれば，司祭にこの世の歓びを贈るという機能を果たしえたのはオリヴィエのみであるといえよう。

ガンビエ医師とラヴィーユ医師

ガンビエはランブルの教区においてその実力以上の名声を勝ちえている医師である。死者をみとるときにも辛辣な冗談を忘れず「痛ましい裸体にかけられ

た白布をめくり，眉ひとつ動かさずにいっさいを眺め，どんなことでも聞きだすことのできる」[S.288] 人物として描かれる。われわれとしてはこの医者がベルナノスの描く相反する2つの医師像のうちの一方に典型的な属性をそなえていることを指摘したい。たとえばガンビエと同タイプの人物として『ウィーヌ氏』に登場する医師をあげることができる。彼は，匂いの強迫観念にとり憑かれた村長の手記のなかにその過去の性的過ちを発見し，それによってすべての謎が解明されたと思いこむ[7]。またムーシェットの愛人ガレ医師は，彼女から前の愛人殺害の事実をうちあけられたとき，その真実性を直感しながらも彼女と秘密を共有することを恐れ，犯罪そのものを彼女の妄想のせいにしてしまう[8]。彼らは科学的見解を重んじるあまり，すべてを衛生の問題に還元してしまうか，あるいはまた自身の脆弱さを隠すためにその見解を利用するかのいずれかである。医師という職業上，人間の悲惨に触れる機会をもちながら，彼らはけっしてそれを身にひきよせて考えようとしない。

しかるに同じ医師でありながら彼らとは対照的に，人間の悲惨にかかわらずにはおれない人物をもまたベルナノスは創造している。『田舎司祭の日記』のデルバンド医師，そしてこのラヴィーユ医師がそうである。アンブリクールの司祭に胃癌の宣告をくだす彼は，自らもまた悪性リンパ肉芽腫という稀な病気で死に瀕している。しかもその病気は彼が学位論文でとりあつかったものであるだけになおさら自身の死を見つめることを余儀なくされている。このような死との対峙というテーマは，ベルナノスの他の作品においてもしばしば見うけられる。たとえば彼の最晩年の戯曲『カルメル会修道女の対話』は死への不安をめぐって展開しているといっても過言ではない[9]。主人公のブランシュは母親の胎内にいたときからすでに死を体験し，自身の不安を受けとめる者は神より他にないと信じてカルメル会の修道女を志願する。その決心をはじめは貴族の娘の気まぐれとしか見なさなかった院長は，彼女が修女名として「キリストの死の苦しみのブランシュ修女」[1587] を選びたいと考えていることを知り，心を動かされる。かつて同じ名を選ぼうとした院長は，一生のあいだ死についての瞑想を重ね，病のため死を目前にしている。そしてついに今際のきわに恐怖のため錯乱状態におちいった彼女はブランシュを死の床に呼び，その苦悶のさまを見せつける。ブランシュは恐れおののきながらも院長がそのような死をこそ望んだのだと直感する。院長が彼女にその死のさまを見せたのは，同じ修

女名を選んだ者としての連帯感であるといえよう。同様に，ラヴィーユ医師とアンブリクールの司祭とのあいだに連帯感が存在するとすれば，それはまさに死に他ならない。ところでベルナノスは1926年のフレデリック・ルフェーブルによるインタビューのなかで，『悪魔の陽の下に』を書いた直接のきっかけとは第一次世界大戦であると述べている[10]。戦場に駆りだされた人々は自身の死を見つめる間もなしに空しく殺されたが，それにもかかわらず国家は彼らをこぞって聖人に祭りあげた。この虚飾に強い憤りをおぼえたベルナノスは，剥ぎとられた死の意味を人々に返還することを切望した。死は真向から見つめられ，その不安と恐怖は味わいつくされなければならないのである。

ランブルの聖者の病状を案じたリュザルヌの司祭に要請されて，ガンビエは聖者を診断すべく彼を捜しまわるが，2人は結局出会うことはない。この医師と聖者とのあいだには何の関係性も見いだされない。これにたいしてラヴィーユ医師は司祭を診察し，彼に死の宣告をあたえる。そればかりか自身も死に瀕することによって司祭と苦しみをともにしさえする。ランブルの聖者とガンビエの関係とは対照的に，アンブリクールの司祭とラヴィーユ医師は死によって強い連帯を結んでいるのである。このようにガンビエとラヴィーユは，医師という職業上，相手に死の宣告を下すという機能をもち，いずれも聖人に死を与える可能性を有していたはずなのに，その機能を発揮したのはひとりラヴィーユのみなのである。

リュザルヌの司祭とデュフレティ

現職の司祭と還俗した司祭という違いこそあれ，ともに凡庸な2人はいずれも主人公の司祭の最後の友人として描かれる。ヴェルディエルの分類では，サン・マランと同様にリュザルヌの司祭もまた「敷居」の外部に位置づけられた人物である。ランブルの聖者が死んだ子供の横たえられた部屋の敷居を越えるとき，彼は自分の後につきしたがってきたリュザルヌの司祭をその場におしとどめる。これによって聖者はそれとは気づかず，外部の侵入者から聖なる空間を守る番人になっているのである[11]。『悪魔の陽の下に』においてサン・マランやリュザルヌの司祭がこの聖なる空間に入ることを許されず，ドニサン神父とムーシェットのみが許されているとすれば，「敷居」を介して登場人物は画然と2種類に分類されることになろう。それは人間を卓越したものと凡庸なも

のとに二分することに他ならない。『田舎司祭の日記』ではこの二分化の結果としてデルバンド医師の死が語られる。

トルシーの司祭はデルバンド医師の葬儀のさい，自殺ではないかと疑うアンブリクールの司祭につぎのように語る――

> 全ての不幸は，おそらく先生が凡人を憎んだことからきたのだ。私はよくいったものだ。「君は凡人を憎んでいる」と。先生はそれにたいしてろくに弁解もしなかった。くりかえすけれど先生は正義の人だったからね。いいかい，気をつけなければいけないよ。凡人は悪魔の罠だ。凡庸というものはわれわれにとってあまりにもこみ入りすぎている。それは神の問題なのだ。[J.1123]

貧者にたいし身を捧げたデルバンド医師は，たとえ彼らから軽蔑されようとも社会のアウトサイダーたちに深い共感を示した。しかしトルシーの司祭によれば，彼が愛したのは彼と同族の人間ばかりだったのである。デルバンド医師の抱いた凡庸な人々への憎しみが彼を破滅へと導いたのだとトルシーの司祭はいう。デルバンド医師の死は凡庸さとの和解のはかりがたい困難さを表わしているといえよう。アンブリクールの司祭が兵士であるオリヴィエや英雄的な努力で自分の死と向かいあっているラヴィーユ医師のなかに自身の姿を投影できる人物であるなら，彼にとってもまた凡庸さとの和解がいかに大きな試練であるかはいうまでもあるまい。ラヴィーユ医師のもとで胃癌であることを宣告されたとき，彼は大きな衝撃を受ける。死は彼に巨大な試練として迫ってくる。しかし物語は彼が死を受け入れることによって終局を迎えるのではない。司祭にはさらに昔の友人であるデュフレティのもとを訪れ，凡庸さと和解するという試練がまっているのである。これは，人間にとっての最終的な試練が必ずしも死であるとはかぎらないことを示しているといえよう。凡庸さとの和解はアンブリクールの司祭にとって最後の試練であるがゆえに最も困難なものなのである。

ところで年齢や生まれつき，死病に冒されていることや手記を残しているところまで主人公の司祭に酷似しているデュフレティは，その凡庸さと惨めさのゆえに現代のキリストともいえるだろう。そしてそれがゆえにアンブリクールの司祭の死は彼にゆだねられなくてはならなかったのである。また物語の最後で，デュフレティが司祭の死に様を伝えるためにトルシーの司祭に宛てた手紙

には，彼が同棲していた女性とすでに別れたことを仄めかす一文があるが，司祭の死後デュフレティが残された「田舎司祭の日記」を読むことは確実であり，それは必ずや彼をふたたび聖職へと導くことになろう[12]。だとすれば，アンブリクールの司祭の死は別の司祭にふたたび命を与えることであり，とりもなおさず彼の復活を意味するといえるのではないか。彼の死が凡庸な司祭に命を吹きこむのにたいし，子供を蘇生させるというランブルの聖者の試練に立ち会ったリュザルヌの司祭は，そのあまりにも強烈な印象に衝撃を受け，健康に変調をきたしたすえ，ついには死にいたるのである。この凡庸な司祭は卓越した力をもつ者によって殺されたといえるだろう。2人の司祭は主人公の司祭にたいし自らの凡庸さをさしだした。彼らは主人公の司祭を凡庸さと和解させるべく機能するはずだったのに，アンブリクールの司祭はそれと和解し，ランブルの聖者はそれを拒む。とすればここにおいて期待された機能を果たしえたのはデュフレティのみであることがわかる。

以上のように『田舎司祭の日記』と『悪魔の陽の下に』の後半部に登場する3人の人物について比較検討をおこなってきたが，彼らはそれぞれに対照的な属性を有しながらも，聖人にたいしては同じ機能を果たすべく現れた。オリヴィエ，ラヴィーユ医師，デュフレティの3人は，アンブリクールの司祭にそれぞれこの世の歓び，死，凡庸さとの和解をもたらす。一方，サン・マラン，ガンビエ，リュザルヌの司祭は前3者と同じ機能を負って現れながらもその機能を発揮することができないのである。この彼らの機能の発揮と停止は，聖人の試練であった子供の蘇生の成否に帰すことができるのではあるまいか。

結　語

物語の前半に登場する2人の老司祭ムヌゥ＝スグレとトルシーの司祭が主人公にその使命を教え，反抗的な2人の少女ムーシェットとシャンタルが彼らの聖人としての成熟に手を貸すという同様の属性と機能をもつのにたいし，物語の後半の人物はそれぞれ対照的な属性を有する。そして主人公の司祭にたいしてオリヴィエは青春を，ラヴィーユ医師は死を，そしてデュフレティは凡庸さとの和解をもたらすのである。聖人としての彼の生はここにいたって完結するものである。一方，サン・マランが失われた青春の残骸であり，ガンビエ医師

が科学的見地から分析され解体された人間の死であり，そしてリュザルヌの司祭が単なる凡庸さの象徴であることを思えば，『悪魔の陽の下に』の3人は『田舎司祭の日記』において聖人に均衡をもたらした者たちの哀れなカリカチュアにすぎないといえるだろう。さらにまた，リュザルヌの司祭がランブルの聖者の試練の場に立ち会ったために命を落とし，アンブリクールの司祭の残した日記はデュフレティを再び聖職へと赴かせるであろうことを考慮すれば，前者は闇の，後者は光の聖者として，その対照はいっそう鮮明なものとなる。

註

1）『悪魔の陽の下に』と『田舎司祭の日記』のテクストとしてはプレイアッド版『小説集』(Georges BERNANOS, *Œuvres romanesques*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1988) を使用し，同版からの引用はそのページ数のみを［ ］内に記す。訳出にあたっては，山崎庸一郎による邦訳（『ベルナノス著作集』第1巻，春秋社，1976年）と渡辺一民による邦訳（同著作集第2巻）を参照した。なお，ふたつの作品からの引用を区別するために『悪魔の陽の下に』はSを，『田舎司祭の日記』にはJを，それぞれページ数の前においた。

2）Voir Marylin E. KIDD, «Les miroirs et l'importance du reflet dans les romans de Bernanos», in *Études bernanosiennes 19*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1988, pp. 143–155.

3）Voir Pierre VERDIEL, *Le seuil. Présence et parole. Essai de topo-analyse dans «Sous le soleil de Satan» de Bernanos*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1986, pp. 101–120. ヴェルディエルの分析によれば『悪魔の陽の下に』の登場人物は「敷居」にたいする関係性によって3つのタイプに分類される。すなわち，1)「敷居」の外部に位置する人物。彼らは文字どおり敷居内部の空間とかかわりをもつことができない。ここにはリュザルヌの司祭，ムヌゥ＝スグレ，ムーシェットの父親マロルティ，愛人のカディニャン侯爵が含まれる。2)「敷居」に脅威を感じる人物。敷居の内部に踏みこむことはできないが，その存在を感じとり恐れを抱く。サン・マラン，ガレ医師。3)「敷居」の人物。内部の聖なる空間とかかわりをもつ人物。いうまでもなくドニサン神父とムーシェット。

4）Voir Michel ESTÈVE, «La nuit de Gethsemani», in *Études bernanosiennes 18*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1986, p. 91.

5）Voir Léon CELLIER, «L'attraction paternelle», in *Études bernanosiennes 12*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1971, pp. 111–120.

6）Voir VERDIEL, *op. cit.*, pp. 113–117

7）*Œuvres romanesques*, op. cit., p. 1524. 『田舎司祭の日記』の創作の源になったのは，ベルナノスが幼年時代を過ごしたフレッソンでの思い出と『ウィーヌ氏』である。この作品の16章にあたる，嗅覚による強迫観念にとり憑かれたフヌイーユの村長アルセーヌと司祭との対話を書いていたとき，彼はその名をもたぬ司祭を描いてみたい衝動に駆られたという（voir *ibid.*, p. 1879)。ちなみに『悪魔の陽の下に』についてベルナノス自身は「嵐の夜に打ち上げられた花火」であると語っているのにたいし，『田舎司祭の日記』にはまるで「自分のものではないかのような」愛情を抱いていたという。彼が作家としての自負を感じた作品が，10年の歳月を傾けた『ウィーヌ氏』であるのにたいし，最も愛した作品は『田舎司祭の日記』であった（voir Albert Béguin, *Bernanos*, Paris: Éd. du Seuil, coll. «Écrivains de toujours», 1954, p. 173)。

8）*Œuvres romanesques*, op. cit., pp. 110–115. ヴェルディエルは，ムーシェットの罪の告白を拒絶するがゆえにガレを「敷居」に脅威を感じる人間に分類している。

9）ベルナノスはこの作品の冒頭部に『歓び』からの引用である一節をおき，恐怖とは最期の瞬間に神と人間との間でとりなしをしてくれるものだと述べている。Voir *Œuvres romanesques*, op. cit., p. 1565.

10）Voir Frédéric Lefèvre, «Interview de 1926 par Frédéric Lefèvre», in Bernanos, *Essais et écrits de combat*, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1971, p. 1040. このインタビューでベルナノスは，国家が自らの非を正当化するために戦没者にたいして聖人という名を与えたことを激しく非難し，「これらの人々〔戦没者〕を私は英雄とも呼びたくありません」と語っている。ちなみにマルト・モリナリは，聖人の生涯は英雄のそれとは異なる秩序によって支配されるというベルナノスの言葉を援用して，ドニサン神父にたいする分析をおこなっている（voir Marthe Molinari, «Donissan, le champion de Dieu», in *Études bernanosiennes 3/4*, Paris: Lettres Modernes Minard, 1963, p. 117)。

11）Voir Verdiel, *op. cit.*, pp. 102–104

12）Voir Anne Penicaud, «Approches de la vision bernanosienne de la pauvreté», in *Études bernanosiennes 18*, op. cit., pp. 125–126.